

沖縄のエコツーリズム体験学習を通じて考える持続可能な開発

～沖縄ゼミ合宿を通じて学んだこと～

齋藤文彦ゼミ生一同 平賀 章浩（文責）

はじめに

私たちのゼミのテーマは、「国際開発論」です。「途上国に対する効果的な開発は何か」を学んでいます。しかし実際に途上国へ足を踏み入れ、現状を目にしたことがあるゼミ生は多くありません。そこで、私たちは、夏休みを利用し沖縄でゼミ合宿を行いました。沖縄は独自の文化、日本の他の地域とは違う環境を持つ一方で、就業面では失業率が日本一高く、平均賃金も全国最低レベルであり、他の日本の地域との格差が大きい地域でもあります。つまり日本の中の途上国なのです。

そこでヒトと独自の文化、環境が共生する沖縄において「持続可能な開発とは何か」を現地でのエコツーリズムへの参加、国際協力機構（JICA）沖縄事務所での研修を通し考えました。この合宿での目的は、①今までゼミで学んできた開発・環境問題などに関する内容を沖縄で体感し、自分たちの経験として蓄積することで、それらを今後のゼミでの活動に活かす、②現地の人々と意見交換をすることで、ゼミ生の考えの幅を広げる、③格差社会の現状を知る、の三点です。

これらを踏まえ、以下の通り合宿の詳細について報告します。

1. 9月18日 屋我地島におけるエコツアー参加

この日は今回の合宿のメインとなる沖縄北部にある屋我地島でのエコツアーに参加しました。このエコツアーの主な活動内容は、①マングローブ植樹体験、ならびに②ビーチクリーニングでした。

マングローブ植樹体験では、はじめに屋我地島のマングローブ樹林をインストラクターの方の案内で探索しました。ほとんどのゼミ生がマングローブを見るのが初めてで、目の前に広がるマングローブだけを見るとまるで東南アジアにでも来たかのような感動にひたりました。そこには干潟の広がり、沢山の命が宿っていました。豊かな自然に支えられている沖縄を肌で感じる事ができました。しかし、一方でマングローブを増やすことだけを重要視し、外来のマングローブ（ヤエヤマヒルギという種のマングローブで繁殖力が強い）を誰かが植樹した結果、屋我地島本来の環境を無視してしまい、本来育つはずのマングローブ（オヒルギ、メヒルギ）の生態を壊してしまっているといった現状

をインストラクターの方からご説明いただきました。環境を無視してしまうとせっかくの植樹も良い結果を生まず、その土地本来の環境を壊すといった最悪のケースが起ってしまうことに、私たちは深く考えさせられました。その土地それぞれがもつ独自の環境を配慮し、全てのものが「共生」できる環境を創造する必要性を強く感じました。これは途上国に対する開発援助の面でも同じことが言えるのではないかと思います。そのことからこのマングローブでの経験は、今後のゼミ活動にも参考になりました。そのことを考えながら最後にはゼミ生それぞれで本来育つはずのマングローブ（オヒルギとメヒルギ）を、気持ちを込めて植樹しました。

また、マングローブ探索と兼ねて行ったビーチクリーニングでは、あまりのゴミの多さに驚きを隠せませんでした。ビーチを歩くにつれ、ゴミがどんどん増えていき、酷いものではゴムタイヤが捨てられていることもありました。明らかに人為的なものであり、「こんなものを捨てるなんてどういう神経をしているんだ」と怒りと共にとても悲しい気持ちにもなりました。

その後宿舎において夜に話し合いを持ちました。その時に、「観光によって人が集まって、その地域が豊かになるのは良いことだと思う。でもそのせいでゴミが増えて、今日見たような生き物が住めなくなってしまうのはとても悲しい。」という意見が出され、これはほぼ全員が感じたことで、まさにその通りだと思いました。観光によって豊かさを得るのは人の自由かもしれませんが、環境を破壊する権利はなく、まして自然に生きる生き物たちの生命を奪う権利ありません。このような、少し考えればわかるようなことに人は気づけていないように感じました。

私たちも、実際にこのツアーを通して自然を体験し、ガイドさんたちと言葉を交わして改めて気づかされたわけですが、そういった大切な事をもう一度感じさせてくれる機会を与えてく

れた、このエコツアーに感謝したいと思います。



屋我地島マングローブ



マングローブ植樹体験

2. 9月19日 JICA 沖縄での研修

この日はJICA 沖縄に訪問させて頂き、海外援助についてのセミナーを受けました。青年海外協力隊として実際に開発途上国で援助をされた方を講師に、途上国での実体験や青年海外協力隊についてなどについてお話して頂きました。お話以外にも「世界がもし100人の村だったら」や識字についてのロールプレイング形式のワークショップに参加し、開発途上国の現状を体験しました。訪問前は皆少し緊張気味だったのですが、セミナー前に簡単なゲームをするなど講師の

方々が気さくにお話してくださったおかげで、肩の力を抜き楽しくセミナーを受講することができました。

識字についてのワークショップでは「字が読めない夫婦が病気の子どものために薬を買いに行く」という設定で字が読めないことで被る弊害を体験しました。ゼミ生2人が字の読めない夫婦役をし、パキスタンのウルドゥー語で「水」、「農薬」、「薬」と書かれた3本のペットボトルから薬を選ぶという形で進められました。英語などとは違い勉強したことのないウルドゥー語は全く文字の意味が分からず、店番も字の読めない子どもだったため、容器の形や色などを頼りに勘で選び、買って帰った結果、間違っって農薬を選んでしまい、それを飲んだ子ども役のゼミ生は死んでしまいました。

私たちは読めることが当たり前になっているため、このように実際に「字が読めない」ことを体験しなければ非識字がもたらす不安や被害を身近に考えることは難しいと感じました。このワークショップの直後に途上国では字が読めずに間違っった薬を買ってしまい最悪死亡してしまうケースが多い、とお話を聞きましたが、体験をしたかしくなかつたかで問題の受け止め方が変わってくるだろうと思います。

本などを読み知識として途上国の現状を知ることもできるのですが、それだけではどうしても「遠い国の問題」と捉えてしまいがちになるため、今回のセミナーは大変貴重な体験になりました。また体験形式のセミナーは途上国の現状や問題を身近に捉えることができる他、ゲーム形式で行われるので小さい子どもにも適しており、開発教育についても知識を深めることができました。

またワークショップなど以外にもセンター内の施設見学をはじめ、途上国各国の研修生の方々の研修風景を見学させていただき、こちらも大変貴重な体験となりました。お忙しい中セミナーを開催してくださった JICA

沖縄の皆様に感謝いたします。



JICA 沖縄



識字ワークショップ

おわりに

最後に沖縄での三日間の活動を通じ、私たちが感じ、考察したことを述べます。

沖縄合宿の目的の一つとして格差社会の現状を知ることが挙げられます。

沖縄の所得状況を知るため、全国展開をしているコンビニを訪れました。これは、本土にも存在し、全国展開しているコンビニを訪れることで本土との所得を明確にし、さらにコンビニ内で販売されている商品で沖縄の物価を知ることができると思ったからです。

空港のある那覇市、宿泊した国頭郡、植樹体験を行った名護市（屋我地島）でいくつかのコンビニを訪れ、給与を調べましたが、ど

の店も600円台から700円台で本土では考えられないような給与でした。大学のある滋賀県や京都で同じ会社のコンビニの給与は大体800円台であることから、その差は歴然だと言えます。ならば、店内の商品が本土より安いかと思ひ、商品の値段を見てみるとこちらも値段はほとんど変わりませんでした。所得が低い割に物価はほとんど変わらないということが私たちの見た現状でした。

次に開発についての理解を深めるため、屋我地島でマングローブ観察と植樹体験を行いました。先にも述べたとおり、私たちが訪れたところには数種類のマングローブが生息していました。その中には本来はそこに生息するはずのない種のものも含まれ、それが現地の生態系を脅かしているという現状がありました。

また、観察と同時にビーチクリーニングを行いました。インストラクターの方を含めた18人でたった数時間の間に大量のゴミ(大型ゴミ袋3~4袋分)が回収されるという結果になりました。それほど観光名所ではない同地でさえこれほどのゴミが捨てられているのですから、観光名所の多い地域にはさらに多くのゴミが捨てられていると推察できます。

観光開発による観光客増加がこの現状を招いたのは歴然であると言えます。開発が沖縄地域を発展させたのは明白ですが、同時に沖縄特有の財産である綺麗な海やマングローブなどの自然が破壊されていました。開発者の独りよがりによる一歩的な開発はこのような環境破壊・文化破壊を招きます。

開発と同時にその地域の特性をいかに残していくかが今後の開発における留意点になると思います。

JICA 沖縄訪問では3日間の沖縄合宿で感じた体験を世界基準に置き換えて考察することができました。

世界的に見れば裕福な日本だが、同じ日本国内だけでもこれほどまで格差があります。

南米やアフリカなど第三世界と呼ばれる地域ではさらに所得が低く、社会制度が未熟なことを考えると、世界的な格差の是正は急務だと言えます。格差の要因の一つとして現地生産物における不公平な貿易が挙げられます。日本がどれだけODAなどで現地に施設などを建設していったとしても、それを持続・発展させていくだけの財力、能力が現地になければ意味がありません。さらに、公正な取引で現地の人びとが持続的且つ安定的で生活に必要な収入を得ることができるよう配慮することが必要だと考えます。

また、開発に関しては現地に根ざした開発を行うことが最重要課題だということを感じました。マングローブの例を見ても分かるように、現地に不適合な開発を行ってしまうと現地の生態系破壊を招き、現地住民の生活にも影響を及ぼしてしまいます。

「持続可能な開発」には、現地の環境や文化を残したまま、発展させることが必要であり、発展のみに主眼をおくのではなく、総合的にその地域を分析し、現地の特性を残した上で発展させる方法を考えることが重要だという結論にいたりました。